

木曾川

北原白秋

青空文庫

「ほら、あれがお城だよ」

私は振り返った。私の背後からは円い麦稈帽むぎわらぼうに金と黒とのリボンをひらひらさして、白茶しろちやの背広に濃い花色のネクタイを結んだ、やつと五歳と四ヶ月の幼年紳士がとても潔いさぎよく口をへの字に引き緊しめて、しかもゆたりゆたりと歩いていた。地蔵眉じぞうまゆの、眼が大きく、汗がじりじりとその両の頬に輝いている。

名鉄めいてつの電車を乗り捨てて、差しかかった白い白い大鉄橋——犬山橋いぬやま——の鮮あざやかな近代風景の裏のことである。

暑い、暑い。パナマ帽に黒の上衣うわぎは脱いで、抱えて、ワイシャツの片手には鶏にわとりの首のついたマホガニーの農民美術のステッキをつけてゆく、その子の父の私であつた。

「うん、そうか」

父と子とはその鉄橋の中ほどで立ちどまると、下手向きしもての白い欄干らんかんに寄り添って行った。隆太郎りゅうたろうは一所懸命に爪立ち爪立ちした。頤あごが欄干の上に届かないのだ。

ちようど八月四日の正午、しんしんと降る兩岸の蟬時雨であつた。

汪洋たる木曾川の水、雨後の、濁つて凄まじく増水した日本ライン、噴き騰る乱雲の層は南から西へ、重畳して、何か底光のする、むしむしと紫に曇つた奇怪な一脈の連峰をさえ現出している、その白金の覆輪がまた何よりも強く眼を射つたのである。その下流の右岸には秀麗な角錘形の山（それは夕暮富士だと後で聞いたが）山の頂辺に細い縦の裂目のある小松色の山が、白い河洲の緩い彎曲線と程よい近景を成して、遙には暗雲の低迷したそれは恐らく驟雨の最中であるであろうところの伊吹山のあたりまでをバツクに、ひろびろと霞んだうち展けた平野の青田も眺められた。

その左岸の犬山の城である。

まことに白帝城は老樹蓊鬱たる丘陵の上に現れて粉壁鮮明である。

小さな白い三層楼、何と典麗なしかもまた均齊した、美しい天守閣であろう。この城あつて初めてこの景勝の大観は生きる。生きた脳髓であり、レンズの焦点である。まったくかの城こそは日本ラインの白い兜である。

「お城には誰がいるの」

「今は誰もいないんだ。むかしね兵隊がいたんだよ」

私はその子の麦稈帽むぎわらぼうを軽くたたいた。かの小さな美しい城の白光はつこうが果はたしていつまでこのおさない童子どうしの記憶あかに明り得うるであろうか。そしてあの蒼空あかが、雲の輝あかきが。

父はまたその子の麦稈帽を二つたたいた。私は心ひそかに微笑した。「すこし強くたたいて置け」。

私の長男である彼隆太郎かれは、神経質だが、意思は強そうである。一緒に行く、機関車に取りついてでもついて行くといつてきかないので、やむなく小さなリュックサックを背負わして連れて出たものだが、下りの特急の展望車くだで、大きな廻転椅子むかに絵本をひろげていた時にもこの子は一個の独自の存在であった。食堂のテーブルに向い合むかった僅わずかな時間のひまにも、この子はおぼつかないながら、ナイフとフォークとは確たしかに自分の物として、焼きたてのパンや黄色いバターや塩っぱいオムレツの上むかのぞんで、決して自分を乱みださなかった。箱根の嶮路けんろにかかって、後部の大きな硝子戸がらすどに、機関車がびったりとくつつき、そのまま轟ごうごう々と真まつ黒い正面をとどろかして押し昇のぼった時にもそれを見たこの子は、それこそひとりで大喜びであった。その夕方、名古屋の親戚の家の玄関に立った時にも、別に鼻白はなしろもしなかった。彼が生れた日だけしか彼を見なかったその伯母おばさんが「ほう、おまえが隆坊。まあ大きくなりましたね、おお。よく似ているわね、うちの子に。ほほほ」。

よくまあお父さんについて来られましたね、と驚いて、その式台しきだいで微笑された時にも、この子はうんとだけいって笑った。そうして自分で靴をぬぐとすぐに飛び込んで行った。生みの母に初めて離れて遠い旅に出るこの子に、この子の母はよくいってきかした。「ね、坊や。自分のことはみんな自分でするのですよ」。

だから、その晩にも、かれはひとりで必死になって上衣を脱いだり、パンツや、シャツの釦ぼたんをはずしたり、寝衣ねまきに着更きかえたり、帯を結んだり、寝床にころがったり、眠ったりした。

その翌朝の今日のことである。柳橋やなぎばし 駅から犬山橋までの電車の沿線には桑くわが肥え、梨が実り、青い水田のところどころには、ほのかな紅あかい蓮はすの花が、「朝」の「八月」の香においを爽さわやかな空気と日光との中に漂たわわしていた。そうしたがすがしい眺めと薰かおりとをこの子はどんなに貪むさぼり吸ったことか。父とまた初めて旅するこの子の瞳はどんなに黒く生いき々と燃えていたことか。そうして酒徒しゅととしての私にはやや差し障りそうな道連みちづれではあったが時とすると侮あなどり難い小さな監督者であろうも知れぬが、だが、私自身にも寧むしろ或あるはそれを望んだ心もちもあつた。

私はわが子の両手を強く握った——よく一緒に遣やつて来た。来てほんとなよかつたのだ。

まことに白帝城は日本ラインの白い兜である。

座におお、そうして、白い臍たけた昼のかたわれ月が、おお、ちようどその白い兜の八幡座にある。

白帝城に登ったのは、その上の麓の彩雲閣（名鉄経営）の楼上で、隆太郎のいわゆる「香いのする魚」を冷たいビールの乾杯で、初めて爽快に風味して、ややしばらく飽満した、その後のことであつた。

その白帝園の裏手から葉桜の土手を歩いて右へ、緩るいだらだら阪を少しのぼると、犬山焼の同じ構えの店が並んでいる。それから廻ると、公園の広場になる。ところで、極彩色の孔雀がきらきらと尾羽を円くひろげた夏の暑熱と光線とは、この旅にある父子とを少からず喜ばせた。その隣の檻の金網の中には嬉戯する小猿が幾匹となく、頓狂に、その桃色の眼のまわりを動かすのである。

そうだ、ここだつたなと私は思った。金と黝朱の羽根の色をした鳶の子が、ちようどこの対いの角の棒杭に止つていたのである。私はあの時木兎かと思つた、ちかぢかと寄つて見る鳶は頭のまるい、ほんとに罪のない童顔の持主であつた。

そうだった、これが針綱神社だったと私はまた微笑した。

あの冬の名古屋市はまったく恐怖と寒気とで、その繁華な、心臓の鼓動もとまりそうであつた。悪性の流行感冒は日に幾十となくその善良な市民を火葬場に送つた。私もまた同じ戦慄のうちに病臥して、きびしい霜と、小さい太陽と、凍つた月の光ばかりとを眺むるより外なかつた。旅で病むのは何と心細かつたことだろう。それに私は貧しいかぎりであつた。島村抱月先生の傷ましい訃報を新聞で知つたのもその時であつた。

今、私の愛児は、幼年紳士は、急斜面の弧状の、白い石の太鼓橋を欄干につかまり遮二無二はい登ろうとしている。一行の誰彼が哄笑して、やんややんやと背後から押しあげている。隆太郎は嬉々として声を立てる。やつと上つたところで、半ズボンの両脚を前へつるつるである。父の私も前廻りして手をうって囃し立てる。

昔と今と、変れば変わるものだと、私は思う。そうだ、あの頃はまだ日本ラインという名すらさして知られてなかつたのだ。

「日本ラインという名称は感心しないね、卑下と追従と生ハイカラは止してもらいたいな。毛唐がライン川をドイツの木曾川とも蘇川峡とも呼ばないかぎりはね。お恥かしいじゃないか」

「そうですとも、日本は日本で、ここは木曾川でいいはずなんで」

木曾川 橋 畔 の雀のお宿の主人野田素峰子が直と私に和した。

「みんながよくそういいますで」

私たちはいつのまにか、城の正面の柵内にはいりつつあった、軽い足どりで。

浴衣に袴の、白扇を持った瘦せ形の老人が謹厳に私達を迎えた。役場から見えていたのである。

旧記に観ると、この犬山の城は、永享の末に斯波氏の家臣織田氏がこの地を領し、斯波満桓が初めて築いたとある。斯波氏が滅びてから織田、徳川の一族が扱って武威を張った。小牧山合戦の際には秀吉も入城したことがあったというのだが、天下が家康に帰してからは、尾州侯の家老成瀬隼人が封ぜられ、以来明治維新まで連綿として同家九代の居城として光った。

現存の天守閣は慶長四年の秋に、家康が濃州金山の城主森忠政を信州川中島に転封したおり、その天守閣と楼櫓とを時の犬山城主石川光吉に与えた、それを明る年の五月に木曾川を下してこの犬山に運び、これを築きあげたものである。斎藤大納言正成の建築だそうである。

この白帝城は美しい。その総合的美観はその位置と丘陵の高さとが、明らかにして洋々たる河川の太景と相俟って、よく調和して映照しているにある。加えて、蒼古な森林相がその麓からうちのぼっている。展望するに、はてしない平野の銀と緑と紫の煙霞がある。山城としてのこのプランは桃山時代の粋を尽くした城堡建築の好模型だというが、そういえばよく肯かれる。

ただ僅に残って、今にそびえる天守閣の正しい均斉、その高欄をめぐらし、各層に屋根をつけた入母屋作りのいらか、その白堊の城。

外観こそは三層であるが、内部に入れば、それは五層に高まってゆく。

その五層の、昔ながらの木の階段を昇る時、隆太郎は危くころびかけた。そうしてその従兄の三高生から引つ抱えてもらった。

「何でこんなに暗いの、何でこんなに暗いの」といいいいして上つて来た。

「あ、名古屋城が見える」と、誰かが叫んだ。

天守閣の最上層の勾欄へ出たところで、私たちはまず両方の大平野を瞰望した。きのう電車で駛つて来た沿線の曠田の緑と蓮池の薄紅とが遙に模糊とした曇天光ま

で続いて、ただ一つの巒らん色しよくの濃い、低い小牧山が小さく鬱うつくつ屈くつしている。その左にほうふつとして立つ紫の幻塔が見える、それが金の鱗うろこのお城だというのである。そう聞けば何か閃々せんせんたる気魄きはくが光っているようでもある。

その地平線は白の地に、黄と少量の朱と、藍あゐと黒とを交ぜた雲と霞かすみとであつた。その雲と霞は数条の太い煤煙ばいえんで掻き乱されている。鮮麗せんれいな電光飾の輝く二時間前ぜんの名古屋市である。

東から北へと勾欄こうらんへついて眼を移すと、柔かな物悲しい赤と乾酪色チーズの丘陵まるとのうねりが閑のれかな日光の反射にうき出している隣に、二つの円い緑の丘陵が大和絵さながらの色調で並んで、その一つの小高みに閑雅かんがな古典的の堂宇どううが隠見いんけんする。瑞泉寺山ずいせんじだと人がいつた。

瑞泉寺山から継鹿尾つがのお、鴉ケ峰からすみねと重疊ちようじようして、その背後から白い巨大な積雲の層がむくりむくりと噴き出していた。そのすばらしい白と金との向うむこに恵那えな、駒ケ岳おんたけ、御岳おんたけの諸峰が競つて天を摩ましているというのだ。見えざる山岳の気韻きいんは彼方かなたにある。何と籠こもつたぶどう鼠ねずみの曇り。

と、蕭々しょうしょうとして、白い鉄橋の方へ時雨しぐるる蝉せみのコーラスである。

爆音がする。左岸の城山に洞門を穿つのである。奇岩突兀として聳え立つその頂上に近代のホテルを建て更に岩石層の縦の隧道をくりぬき、しんしんとエレヴェーターで旅客を迎える計画だそうである。遊覧船は屋形、或は白のテントを張って、日本ラインの上流より矢のように走って来る。その光、光、光。恰も中古伝説の中の王子の小船のようにちかりちかりとその光は笑って来る。

「おうい」と呼びたくなる。

中仙道は鵜沼駅を麓とした翠巒の層に続いて西へと連るのは多度の山脈である。鈴鹿は幽かに、伊吹は未だに吹きあげる風雲の猪色にその嶺を吹き乱されている。

眼の下の大河を隔てた夕暮富士を越えて、鮮かな平蕪の中に点々と格納庫の輝くのは各務ヶ原の飛行場である。

西は渺々たる伊勢の海を眼界の外に霞ませて桑名へ至る石船の白帆は風を孕んで、壮大な三角洲の白砂と水とに照り明って、かげつて、通り過ぎる、低く、また、ひろびろと相隔たつた両岸の松と楊と竹藪と、そうして走る自転車車の輪の光。

白帝城は絶勝の位置にある。

私は更に俯瞰して、二層目の入母屋の葺にほのかに、それは奥ゆかしく、薄くれないの

線状の合歡ねむの花の咲いているのを見た。樹木の花を上からこれほど近くしたし観ることは初めてである。いかにも季節は夏だと感じられる。

絶壁の上の楓かえでの老樹も手に届くばかりに参差しんしと枝を分ち、葉を交えて、鮮明に澄んで閑のどかな、ちらちらとした光線である。

幾百年と経った大木の樟くすのきは樹皮は禿はげ、枝は裂けていい寂色さびいろに古びている。その梢こずえの群ぐんじょう青からすを鴉からすかはたはたと動かしてとまる。かおオかおオである。古風な白帝城。

水道の取入口は河に臨んで、その城の絶壁の下にあった。

私たちは城を降りると、再び暑熱しよねつと外光の中の点景人物となった。ひらひらと、しきりに白い扇が羽ばたき出した。

公園からだらだらさかの阪にしたにを西谷にししたにの方へ、日かげをえら選み選み小急ぎになると、桑畑の中へ折れたところで、しおらしい赤い鳳仙花ほうせんかが目についた。もう秋だなど思う。

簡素な洋風の家がある。入口は開けっぱなしで、粗末な卓に何か仕事しているワイシャツの人がある。役場の老人が寄って行って挨拶あいさつする。幽かすかに私の名をいっている。

私たちは洞門に入る。外へ出ると豁然かつぜんとひらけて、前は木曾の大河である。

この大河の水は岩礁を割さいた水道のコンクリートの堰せきと赤さびた鉄の扉の上を僅わずかに越え

て、流れ注いで、外には濁った白い水沫と塵埃とを平らかに溜めているばかりだ。何の奇もなく閑けさである。

「この水が名古屋全市民の生命をつないでいるのです」と詰襟をはだけた制帽の若者が説明する。

私たちは引返して、洞門をくぐると、二台の計量機の前に出た。幽かに廻っている円筒の方眼紙の上に青いインキが針から滲んで殆ど動くか動かぬかに水量と速度とをじりじりと鋸形に印して進む。そこで若者は三和土の間の方五、六尺の鉄板の蓋を持ちあげる。暗々たる穴の底から冷気が吹きあがる。水は音なく流れて、地下十八尺の深さを、遙の大都会へ休むなく奔りつつ圧しつつある。しんしんとしたその奔入。

詩歌の本流というものもちょうどうした深処にあつて幽に、力強く流るるものだ。この本流のまことの生命力を思わねばならない。

私は隆太郎の手をしつかと握った。

彩雲閣へ戻ると、小坊主は直と名古屋へ帰るといい出した。名古屋の伯母さんは昨夜、この子の母に長距離の電話をかけていた。

「病気でもされると申し訳がありませんね。それにお菊さんもまだ一度も里帰りしない

のですから丁度いい折ですし、呼びましようか」ということであつた。それに従兄弟たちは大勢だし、汽車や電車のおもちやはあるし、都会は壮麗だし、何か早く帰りたいらしかつた。

「じゃあ、そうするか、たのむよ」と私は甥の三高生にその子を託した。

空は薄明となる、パツと園内のカンツリー・ホテルに電灯がつく。白、白、白、給仕とテーブル。

かえろかえろと、どこまでかえる。

赤い灯のつく三丁きまでかえる。

かえろが啼くからかえろ。

並木の鈴懸の間を夏の遊蝶花の咲き盛った円形花壇と緑の芝生に添って、たどたとと帰ってゆく幼年紳士の歌声がきこえる。

「おうい」

私は二階の欄干へ出て両手をあげる。

「ほうい」

向うでもこちらを見て両手をあげる。

白いかたわれ月は臍^{ろう}たけて黄^{あか}に明^あつて来る。ほのかに白い白帝城を、私の小さい分身の子供が、立つて停^{とま}つて仰^あいでいる。

二

舟^{さかのぼ}は遡^{さかのぼ}る。この高瀬舟の船尾には赤の柁^{わく}に黒で彩^{さい}雲閣^{うんかく}と奔^{ほん}放^{ほう}に染め出したフラフが翻^{ひるがえ}つている。前に棹^{さお}さすのが一人、後^{うしろ}に櫓^ろをこぐのが一人、客は私と案内役の名鉄^{めいてつ}のM君である。私は今日初めて明るい紫紺^{しこん}に金^{きん}釦^{ぼたん}の上衣^{うわぎ}を引っかけて見た。藍^{あい}鼠^{ねずみ}の大柄^{おほ}のズボンの、このゴルフの服は些^{いさ}かはで過ぎて市^{しちゆう}中は歩かれなかった。だが、この鮮麗^{せんれい}な大河の風^{ふう}色^{しよく}と熾^{しれつ}烈^{れつ}な日光^{にかり}の中では決して不調和ではない。私は南国の大きい水^{みず}禽^りのように碧^{へきりゆう}流^{りゅう}を遡^{さかのぼ}るのだ。

爽快である。それに泡だつたコップのビール、枝豆の緑、はためく白いテントの反射光だ。

五日の午後一時、昨日のすさまじい濁流はいくらか青みを沓^さえ立たして来たが、一旦^{いったん}激増した水量はなかなかひきそうに見えない。だが、裸の子供が飛び込む、飛び込む。燦^さ

んさん
々たる岩の群と、ごろた石の河原と兩岸のいきるる雑草の花とだ。

泳げよ泳げ。

左は楊やなぎと稚松わかまつと雑木の緑と鬱うつした青とで野趣やしゆそのままであるが、遊園地側の白い道路は直立した細い赤松の並木が続いて、一、二の氷こおりみせ店てんや西洋料理亭の煩はんざつ雑ざつな色彩が畸き形けいな三角の旅館と白い大鉄橋風景の右袂たもとに仕切られる。鉄橋を潜ると、左が石頭山せきとう、俗に城山である。その洞門のうがたれつつある巖壁がんぺきの前には黄の菰むしろ、バラック、鶴つるはし、印半纏しるしぼんでん、小舟が一、二艘そう、爆音、爆音、爆音である。

と、それから、人造石の樺かばと白との迫持せりもちや角柱かくばしらばかし目だった、俗悪な無用の贅ぜいを凝こらした大洋館があたりの均斉を突如と破つて見えて来る。「や、あれはなんです」。「京都のモスリン会社の別荘で」とM君が枝豆をつまむ。

「悪趣味だ」

だが、ここまでである。それより上は全くの神斧鬼鑿しんぶきざくの蘇川峽そせんとなるのだ。彩雲閣から僅わずかに五、六丁足らずで、早くも人寰じんかんを離れ、俗塵ぞくじんの濁りを留めないところ、峻峭しゅんしやう相連あいつらなつて少すくなからず目をそばだたしめる。いわゆる日本ラインの特色はここにある。

日は光り、屋形の、三角帆の、赤の、青のフラフの遊覧船が三々五々と私たちの前を行

くのだ。

溯航そこうは氷室山ひむろの麓は赤松の林と断崖のほそぼそとした嶮道けんどうに沿って右へ右へと寄るのが法とみえる。「これが犬帰いぬがえりでなも」と後うしろから赤銅しゃくどうの声こゑがする。

烏帽子岩えぼうし、風戾かぜもどし、大梯子おおはしご、そこでこの犬帰の石門せきもん、遮陽石しやようせきというのだそいな。

「ほれ、あの屋根が鳥瞰ちようかんず図を描くYさんのお宅ですよ」

幽邃ゆうすいな繁りである。蝉せみ、蝉、蝉。つくつくほうし。

「この高い山は」

「継鹿尾山つがのお、叡光院えいこういんという寺があります。不老の滝というのもありますが上あがつて御覽ごらんに

なりますか」

「いや、ぐんぐん遡のぼろう」

風が涼しい、潭たんは澄み、碧流へきりゆうは渦巻く。紫紺しこんの水禽みずどりは、遡さかのぼる。遡る。

「あれが不老閣」

「閑静だなも」

と、これより先さきき、中流ちゅうりゅうに中岩ちゅういというのがあった。振り返ると、いつになく左後ろ斜ななめに岩は岩と白い飛沫しぶきをあげている。

それから、千尺の翠巒すいらんと断崖は浣華溪かんかけいとなるのである。

波、波、波、波、波、

波、波、波、波、波、

波、波、波、波、波、

波、波、波、波、

波、波、波、波、波、

「爽快爽快」

「富士ヶ瀬です」

すばらしい飛沫しづき、飛沫、飛沫、奔流しつつ、飛躍しつつ、擾じょうらん乱しつつだ。

一面涼々そうそうたり。

「や」

「赤岩です」とM君。

まさしく瑠璃るりの、群青ぐんじょうの深潭しんたんを擁ようして、赤褐色の奇巖きがんの群々むれむれがかつと反射した

ところで、しんしんと沁しみ入る蝉せみの音がする。

稚い雌松わかめまつの林があり、こんもりとした孟宗藪もうそうやぶがある。藪の外にはほのぼのとした薄く

れないの木の花も咲いている。

「あれは何の木の花だね」

「漆の花だなも」で、巧に棹を操る舳の船頭である。白のまんじゅう笠に黒色鮮かに秀山
霊水と書いてある。

そのあたりが栗栖の里。

と、書き落したが、その漆の花が目に入るまでに、石床の大きなでこの岩、お富
与會松の岩というのがあった。恋は悲しい、遂に添われぬ身の果を嘆いて、お富もまた離
ればなれに上の手の岩から身を躍らしたと俚俗にいう。

「これがローレライで」

ローレライはちと苦笑される。

新赤壁は左にあった。その前を昔の中仙道が通って、ひとつうねると岩屋観音がある。
白い汚れた幟が見える。

ここで再び蕭々たる急湍にかかる。観音の瀬である。

「まだひどい水で」と前のがのめる。

やつのことで、その瀬をのぼり切ると、いよいよ河幅は狭くなる。いよいよ差迫つ

た奇岩怪石の層層層、荒削りの絶壁がまたこれらに脈々と連なりそびえて、見る目も凄
急流となる。惜しいことには水がたかく、岩は半没して、その神工の斧鉞の跡も十分に
は見るを得ないが、まさに蘇川峡の最勝であろう。

齋藤拙堂の「木蘇川を下るの記」に曰く、

石皆奇状兩岸に羅列す、或は峙立して柱の若く、或は折裂して門の如く、或は渴
驥の間に飲むが如く、或は臥牛の道に横たわる如く、五色陸離として相間わり、
皴率ね大小の斧劈を作す、間ま荷葉披麻を作すものあり、波浪を濯うて以て出ず、交
替去来、応接に暇あらず、けだし譎詭変幻中、清秀深穩の態を帯ぶ。

兜岩、駱駝岩、眼鏡岩、ライオン岩、亀岩などの名はあらずもがなである。色を觀、形
を觀、しかして奇に驚き、神悸き、氣眩すべきである。

拙堂も觀た五色岩こそまた光彩陸離として衆人の目を奪うものであろうか。

ただ私の見たところでは、この蘇川峡のみを以てすれば、その岩相の奇峭は豊の耶
馬溪、紀の瀨八丁、信の天竜峡におよばず、その水流の急なること肥の球磨川にしか

ず、激湍はまた筑後川の或個処にも劣るものがある。これ以上の大江としてまた利根川がある。ただこの川のかれらに遙に超えたゆえんは変幻極まりなき河川としての綜合美と、白帝城の風致と、交通に利便であつて近代の文化的施設余裕多き事であろう。原始的にしてまた未来の風景がこの水にある。船は翠嶂山下、深沈とした碧潭に来て、その棹をとめた。清閑にしてまた飄々としている。巉峭の樹林には野猿が啼き、時には出でて現れて遊ぶさうである。

私は舟より上つて、とある巖頭に攀じのぼつた。

蓋し天女ここに嘆き、清軀鶴のごとき黄巾の道士が来つて、ひそかに丹を練り金を練る、その深妙境をしてここに夢み、或は遊仙ヶ岡と名づけられたものである。

遺憾なは「これより上へはどうしても今日はのぼれません」と舟人はまた棹をいっばいに岩に当てて張り切つたことである。

たちまち舟は矢のように下る。

千里の江陵一日にかえる。

おお、隆坊はどうしている。

自動車は駛る。

犬山の町長さんは若い白面の瀟洒な背広服の紳士であった。白帝園はカンツリー・クラブの大食堂で私たち三人——私と素峰子と運転手と——が、この八月六日の極めて簡素な午餐を認めていた時に、たまたま給仕を通じて私に挨拶に見えた。はいつて来ると、名刺を一つ運転手君にまでうやうやしく手交した。若しそうと知ってしたのなら美しいことだと微笑された。またそれほど黒背広の運転手君もひとかどの紳士らしく見えた。すなわち近代の日本ラインである。

カンツリー・クラブは緩い勾配の屋根の、錆色の羽目の中二階で、簡素ない趣味の建築である。バンガロー風で、正面と横とに広い階段がついている。その正面の階段の下の明るい色彩の花壇の前で、私は改めて一礼すると、車上の人となった。雀のお宿の素峰子はきのうの朝から激しい胃痙攣で顔色がなかった。今日も案内がおぼつかないので、犬山橋駅に廻つて、赤い腕章の旅客課の制帽君の同乗をたのむことにした。

自動車は駛る。鉄橋を北へ、まっしぐらに駛つて行く。と、ちらつと、白帝城と夕暮富士とが目を掠める。

きのうの夕焼は実によかつたと思う。その返照はいつまでも透明な黄の霞んだ青磁や水浅葱の西の空に、紅く紅く地平の積巻雲を燃え立たせた。そうして紫ばんで来た

秀麗な夕暮富士の上に引きはえた吹き流し形の、天蓋の、華鬘の、金襴の帯の、雲の幾流は、緋になびき、なびきて朱となり、緹紅となり、灰銀をさえ交えたやわらかな毛ばだちの樺となり、また葡萄紫となった。天守閣のかすかに黄に輝き残る白堊。そうして大江の勾深い色の推移、それが同じく緋となり、緹紅となり、やわらかな乳酪色となり、藤紫となり、瑠璃紺の上びかりとなった。そうして東の瑞泉寺山に涌出した脳漿形の積雲と、雷鳴をこめた積乱雲との層が見る見る黄金色の光度を強めて今にも爆裂しそうに蒸し返すと、また南の葉桜の土手の空にもむくりむくりと同じ色と形の入道雲が噴きあがっていた。この夕焼けもラインとよく似た美しい一つの天象だという。伊吹山の気流の關係で、この日本ラインにのみ恵まれた雲と夕日の季節の祭りである。

私たちの軽舟は急流に乗って、まだ大円日の金の光輝が十方に放射する、その夕焼けの真近をまたたく間に走り下つて来た。そうして白帝城下の名も彩雲閣の河原に錨を下ろし纜をもやつたのであった。と、名古屋から電話がかかかっていて隆太郎の母は直にも見えるはずだということであった。

それが今日は生憎早暁からの曇りとなった。四方の雨と霧と微々たる雫とはしきりに私の旅情をそそった。宿酔の疲れも湿つて来た。

この六日は下の河原で年に一度の花火の大会がある筈であった。名古屋の甥たちや隆太郎にも見に来るように通知はしたが、それもどうやら怪しくなつて来る。果然雨天順延となつて、私の旅行日程にもまた一日の狂いが生じて来たので、無聊に苦しむよりは雨の日本ラインの情趣でも探勝しようかとなつた訳である。

自動車は駛る。

と、気がつくといつこのまにか北へ向かつたので南へ駛りつつあつた。や、例の樺と白との別荘だなどと思うと、中仙道は川添いの松原と桃林との間を東へ東へと驀進しつつある。新赤壁の裾を幾折れして、岩屋觀音にかかる。漢画風の山水である。トンネルがあり、橋がある。路はやや沿岸を離れて桑畑と雌松の林間に入る。農家がある。鳳仙花や百日草が咲き、村の子が遊び、鶏がかけっこっこつである。高原の感じである。

秋、秋、秋、秋。

太田の宿にはいる。右へ折れて鉄橋を渡れば、対岸の今渡から土田へ行けるのだが、それがライン遊園地への最も近い順路であるのだが、私は真直にぐんぐん駛らせる。なるべく上流へ出て迂回しようと思つたのである。

ストップ！ 古井の白い鉄橋の上で、私は驚いて自動車を飛び降りた。その相迫つた峽

谷の翠の深さ、水の碧くて豊かさ。何とまた鬱蒼として幽邃な下手の一つ小島の風致であろう。煙霧は模糊として、島の向うの合流点の明るく広い水面を去来し、濡れに濡れた高瀬舟は墨絵の中の蓑と笠との舟人に操られてすべって行く。

私たちがその青柳橋の上に立っていると、何が珍しいのかぞろぞろと年寄り子供たちが周囲にたかつて来た。この川はと聞くと飛驒川と誰か答えた。高山の上の水源地从り流れて来てこの古井で初めて木曾川に入るのだとまた一人が傍から教えてくれた。じゃあ、あの広いのが木曾川だなど思えて来た。

「あの島にお堂が見えますが、あれは何様ですね」

「小山観音」

「縁日でもありますか」

「ちようど七月の九日が御開帳でして、へえ、毎年です」

「店も出ましようね」

「ええ、河原は見世屋でそれはもういっぱいになりますで」

水に映つて、それは閑雅な灯のちらちらであると思えた、この支流である飛驒川の峡谷はまた本流の蘇川峡とは別趣の気韻をもって私に迫った。上手の眺めにもうち禿た岩石

層は少く、すべてが微光をひそめた巒色らんしよくの丘陵であつた。深沈しんちんとしたその碧潭へきたん。

私たちはまた車上の人となる。藍鼠あいねずみと燠銀いぶしぎんとの曇天、丘と桑畑、台が高いので、

川の所在は右手にそれぞと思つてゆかりで、対岸の峰々や、北国風ほつこくふうの人家を透かし透かし、

どこまでもと自動車は躍つてゆく。土の香かがする。草のかおりがする。雨と空気と新鮮な

嵐と、山蔭やまかげは咽むせぶばかりの松脂まつやにのにおいである。駛はしる、駛る、新世界の大きな昆虫。

「見えた。あの鉄橋からまわりますか」

「よし」

そこでハンドルを右へきゅつと廻す。囂囂ごうごうごうとそのつり橋を渡つてまた右折する。兼か

山の宿ねやまである。と風光はすばらしく一変する。爽快爽快、今来た峡谷むこの上の高台が向う

になる。薄黄の傾斜面と緑の平面、平面、平面、銚杉ほこすぎの層、竹藪、人家思いきり濃く、

また淡く霞かすむ 聳峰じようほう連山、雨の木曾川はその此方こなたの田や畑や樹林や板屋根の間から、突とつ

として開けたり離れたりする。岩礁が見える。船が見える。あ、檜ひのきだ、瓦かわらだ、絵看板だ。

遙はるかにまた煙突、煙突、煙突である。あの黒い煙はと聞くと、あれは太田だという。よく

も上まで来たものだと思つ。いや、かれこれ二時間は走っていますと運転手が笑う。こう

して兼山から伏見ふしみ、伏見から広見ひろみ、今渡いまわたりとかつ飛ばすのである。

土田は名鉄の犬山口から分岐する今渡線の終点に近い。ちらとその駅をのぞいて、また右へ、ライン遊園地へ向けて、またまた鷺進鷺進鷺進である。行けるところまで行って、危く何かにぶつかりそうにしてとまると、奇橋がある。「土田の刎橋」である。この小峡谷は常に霧が湧き易くて、こめると上も下も深く姿を隠すという。重畳した岩のぬめりを水は滞り、碧く澄んで流れて、いうところの鷺の瀬となる。

橋の袂で敷島を買って、遊園地の方へほつりほつりと私たちは歩いてゆく。雨はあがりかけて日の光は微かに道端の早稲の穂にさしかけて来る。七夕の紅や黄や紫の色紙がしつとりとぬれにじんでその穂や桑の葉にこびりついている。死んだ螢のにおいか何かが咽んで来る。あけつばなしの小舎がある。蚕糞や繭のにおいがする。蕙が雑然と積んである。表に「自転車無料です」と貼札してある。この道七、八丁。

宏壮な北陽館の前に出る。二階の渡り廊下の下の道路を裏へ抜けると、ここに驚くべき大洞可児合の壮観が眼下に大渦巻をまきあげる。断崖百尺の上の、何と小さな人間、白の黒の紫紺のぼつり、ぼつり、ぼつりだ。

大洞可児合は蘇川中の一大難所である。その本流と可児川の合するところ、急奔し衝突し、抱合し、反撥する余勢は、一旦、一大鉄城のごとく峭立し突出する黒

褐つかつの岩石層の絶壁に殺到し、遮断されて水は水と撃ち、力は力と抗い、波は岩を、岩は波を噛んで、ここに轟々、淙々の音を成しつつ、再び変圧し、転廻し、捲騰し、擾じ乱ようらんする豪快無比の壮观を現出する。藍と碧と群青と、また水浅葱と白と銀と緑と、渦と飛沫と水漚と、泡と、泡と、泡と。

膚粟はだえあわを生ずとはこのことだろう。私は驚いて数歩下った。

そこで、また踵をめぐらして岩角と雑草の間の小径を香木峡の乗船地へと向つてお
 りた。

しかも明るくひろくうち開けた上流の空の、連峰と翠巒、濛々たる田園の黄緑、人家、煙。霧、霧、霧。

どこかで茶でも飲もうではないか、茶見世ぐらいはあるだろうといえ、ありますありますと答えながら、赤い腕章の制帽はそれでも一軒の葭簣の茶亭は通り越してしまふ。途中に白いペンキ塗の洋館の天狗何々と赤い看板を出したそのドアの前にかかったが、窓のガラスもことごとくしめきつて「当分休業中」であつた。夏でもここまでの遊覧客はさして見えないらしい。ライン遊園地もまだ完成しないで、自然の雑木原に近い。窪地にスケート・リンクなどがあるくらいだから沍寒はきびしいのであろう。崖の縁へ出ると漸

く休憩所の一つを見出した。人の気配もせぬので、のぞいて見ると隅つこの青く透いたサ
イダー瓶の棚の前に、鱗光の河魚の精のような爺が一人、しよぼんと坐っていた。ぼ
うと立つのは水気である。

翠嶂山と呼ぶこのあたり、何かわびしい岩礁と白砂との間に高瀬舟の幾つかが水に
ゆれ、波に漂つて、舷々相摩するところ、誰がつけたかその名も香木峡という。左に碧
くそそり立つのが碧巖峰である。

そこで屋形の船のひとつを私は小手招く、そここの薄墨の、また朱のこもった上の
空の、霧はいよいよ薄れて、この時、雲のきれ間から、怪しい黄色の光線が放射し出
た。これからまたひとしきりなぎになつて蒸し暑く蒸し暑くなるのである。

「じゃあ、ここでお別れます。私は土田へ出てこの山の裏手を廻つて帰りますが、どち
らが早いかひとつ競争して見ますかな」

自動車の運転手が笑つた。

「よかろう」と私たちは舟に乗り込む。船頭はやはり二人で、棹をつつと突張るや否や、
後のが櫓を調べると、櫓をからからとやつて、「そおれ出るぞお」である。

白帝城下まで二里半だということである。

舟は走る、五色の日本ライン鳥瞰図が私の手にある。

「ほう、あれが少女の滝かね」その滝は左の緑蔭から懸つてあまりに幽かな水の線、線、線であつた。

右にうづくまるのがライオン岩、深巖として赭黒である。と、舟は直に遊仙ヶ岡の碧潭にさしかかる。

その仙境を離れると、流れはいよいよ急である。昨日に比して少からず減じた水量のため、河中の巖石という巖石は、ことごとく高く高くせり上つて、重積した横の、斜の斧劈も露わに千状万態の奇景を眼前に聳立せしめて、しかも雨後の霏は燦々と所在の岩角、洞門にうち響きうち響き、降るかとはかりに滾れしきる。

河峽はいよいよ狭く、流れはいよいよ急に、舟は危うく触れんとして、暈岩絶壁のすれすれを走り下る。

「や、あれは」

と、目をみはつた。

一羽、ふり仰ぐ一大岩壁の上に黄褐の猛鳥、英氣颯爽としてとまって、天の北方を睨んでいる。鉤形の硬嘴、爛々たるその両眼、微塵ゆるがぬ脚爪の、しつかと岩

角にめりこませて、そしてまた、かいつくろわぬ尾の羽根のかすかな伸び毛のそよぎである。

「鷹だね」

「え、」と驚いて旅客課「そうです。鷹です」

冷氣一道に襲って、さすがに蘇川は深山幽谷の面影が立った。

「身動きもしないんだね、船が下を通っても」

私は驚いたのである。

心音の動悸が止まぬのに、またしても一羽、右手の駱駝岩の第一の起隆の上に、
巖然としてとまっている。相對した上の鷹、おそらくはつがいであろう。

いいものを見たと思つた。野猿の声こそは聞けなかつたが、それにも増して私は偶然の、時の恩寵を感じずにはいられなかつた。

私は幾度も幾度も振り返つた。

激湍、白い飛沫の奔騰する観音の瀬にかかつて、舟はゆれにゆれて傾く。

鷹は絶壁の遙に黒く、しかも確実に二個の点として巖として小きく小きくなる。

一個は消えても、一羽の英姿はいつまでもいつまでも残つてみえる。その向うの空のぬれ

た黝朱うるみの乱雲、それがやがては褐かつとなり、黄となり、朱あかに丹あかに染まるであろう。日本ライ
ンの夕焼けにだ。

あ、白帝城が見え出した。

香木峡から四十分、彩雲閣の河原に着いて、上あがると、その白帝園のカンツリー・クラブ
の前へ、無料休憩所の方から、驚いたスピードで大型の昆虫の黒あに藍あの自動車はしつて
来た。ハンドルを両手に、パナマを阿弥陀あみだに頭の毛を振り振り、例の快活な笑いの持ち主
だ。

「や、万歳ばんざい、勝負なし」

三

「ほら、坊や、さよならだ、帽子をお振り」

「さようならア——」

「もひとつ」

「さようならア——」

下りの高瀬舟に坐っているのは私たち親子と雀のお宿の主人との三人である。

彩雲閣の二階からは盛んに白いハンカチーフがゆれて光る。女中たちである。

私たちも一寸芝居気を出して、パナマや雀頭巾を振る。童話の中の小さな王子のお

蔭で、朗らかに朗らかに私たちも帽子が振れるというものだ。

私たちは下る。赤い雌松の五、六本をあしらった二重舞台の楼閣が次第次第に白帝城

の翠巒に隠れてゆく。ちらとまたその隙間から白いひらひらが見えたかと思うと、また

老樹の榿や楓の鬱蒼たる枝の繁みに遮られてしまう。と、それつきりで、八月八日は午

前十一時の閑寂なせみ時雨になる。日本ラインとのお別れである。

水道の取入口も過ぎ、西谷は迎帆楼の前も過ぎた。あの前での昨日の人だからとい

うものは昼の花火の黄煙菊よりも埃をあげた。丁髷鬘の赤陣羽織に裁付袴

の爺どもが拍子木に鉦や太鼓でライン酒とかの広告の口上をまくし立てる。その幟の

蔭から、盆の上のリキウグラスに手を出して無料じゃ無料じゃという赤いのを一杯試し

飲みして見たところで、「これは焼酎かね」と聞けば「いや別製でなも、原料水は、

へへん、ラインの水で」と扇を叩いた。「赤いのは」と聞けば「色で染やしたで」とまた

扇を叩いた。色は樺太のフレップ酒に似て、地の味はやはり焼酎の刺激がある。土地の

名産にんとうしゆ忍にん芩とう酒しゆは味淋みりんに強い特殊の香気を持たしたものらしい。

それは兎とに角かく、舟ふねは今、三光さんこう稻荷の下にかかつて来る。三光稻荷の夏祭は津島祭の逆さか鉾かほこ舟——一年十二ヶ月は三百六十五の提ちようちん灯とうを山と飾った華麗と涼味とを極めた囃子はやし舟である——にならつて、これもおなじく水の祭が極ごく彩色さいしきでと町長の話であつた。今後はいよいよ盛んに奨励する意向にも聞いた。民衆の祭は盛んであるほど郷土の意気が勇む。水を祭るは水すいき郷きやうのほこりである。精華である。私の郷きやうこく国筑後の柳河は沖の端の水天宮の水みずまつり祭には、杉の葉と桜の造花で裝飾され、簾すだれを巻き蓆むしろば張りの化粧部屋を取りつけた大きな舟舞台が、幕あいには笛や太鼓や三味線の囃子はやしもおもしろく町の水路を三日三夜よさも上下する。そうして町のかわるたびに幕をかえ、日をかうるたびに歌舞伎の芸げ題だいも取りかえる。そうした小運河はまた近在の小舟でうずまつてしまふ。その五月の喜ばしさというものはなかつた。まことに水は祭られてよい。夏は、風は、魚は、岩は、砂は、この日本ラインにしていよいよ煌こうこう々と祭らるべきである。その三光さんこう稻荷の水の祭もほんのすこし前に過ぎたばかりだということであつた。

「坊や、昨夜ゆうべの花火は奇麗だつたね」

「うん、奇麗だつたね」

ちようど河の中の白い三角洲の横を舟はまた走りつつあった。その洲には赤い旗がひるがえり、数百の花火筒が林立した前の日であった。

隆太郎はその朝、従兄弟たちと名古屋から来た。彼の母はどうとう見えないことになった。すっかり期待を裏切られた幼童の失望はどれほど大きかったか。それでも彼は堪えていた。一生懸命に口を結んで泣くまいとしていた痛々しさが父の胸にはひたひたと響き返した。この暑さにこの幼い子を十余日の旅に連れあるくことは危険でもあり、少々果斷にも過ぎた。それで来られるものならその母に預けて、私は単独に気軽にあるき廻ろうかと思つても見た。何でも余りに便通がないので、名古屋では挙つて心痛したということであつた。「そりやあね、庭の鳳仙花の中か、裏の玉蜀黍畠にでも連れてきやよかつたんだよ」と私は三高生に笑つて見せたが、「それでも下剤薬を飲ましたので通じましたよ」とその甥がまた笑い出した。そうして、「ちよつと泣きましたよ」と顔を赤くした。病氣にでもなられては困るが、兎も角、それでは一緒に連れて行こうとなつた。よしスパルタ教育だ。この旅行は隆太郎にとつては生れて初めての意義ある見学であるのだ。幼児の叡智と感情と感覚と意志との上に増大し生長し洗練さるる何物かは寧ろ危険以上のものであるに違いない。で、私も決行したのであつた。

「や、花火の椀殻だな」

炸裂さくれつした後の黒い半分のちずつの椀殻が水にばかりばかりと漂っている。おしどりのようだ。

まったく、長い、薄明はくめいがいよいよ暮つくして短い夏の夜に入いってからの花火の壮観はすばらしかった。菊花壇きくかだん、菊先乱きくさきらん、二尺玉、三尺玉、大菊花壇、二百発三百発の早打はやうち、電光万雷、銀錦ぎんにしき変花へんか、菊先錦群蝶きくさきにしきぐんちよう、青光残月、等等。燦爛さんらんたる孔雀玉とあみの紫と瑠璃るりと、翡翠ひすいと、青緑せいりよく。紅と緑の光弾べに、円蓋えんがい、火箭ひや、ああ、その銀光の投網とあみ、傘からかさ下し、爆裂し、奔流ほんりゆうし、分枝ぶんしし、交錯し、粉乱ふんらんし、重疊ちようじようし、傘からかさ下し、傘下し、傘下し、八方に爛々らんらんとして一瞬にしてまた闇々あんあんたる、清秀せいしゆうとも、鮮麗せんれいとも、絢爛けんらんとも、崇美すうびとも、驕奢きようしやとも、譬たとうるに言葉も絶えた。加えて波上はじようの炎々たる水雷火すいらいか、その魚鱗火ぎよりんか、連弾光れんだんか、鴉舟うぶねの箒かがり、遊覧船の万灯まんとう、提灯ちようちん、手投げの白金光はくごうか、五彩の変々たる点々光てんてんか、流出りゆうしゆ柳箭りゆうせん、けだし参さんと信しんとの花火芸術の最高を極め精を尽くし神しんを凝こらしたものであった。

空には月明らかに雲薄く、あまつさえ白帝城はくあの蔓いらかと白堊はくあとを耿々こうこうと照らし出したのである。

然しかしました、そうした一夜の歡樂も過ぎた。祭りの後の果敢はかなき、そのあわれきは、この水にしてひとしおである。

舟はいま夕暮富士を右手に、その三角洲の緩ゆるい彎曲線に沿うて左寄りの分流を走りつつすべりつつある。

阪さかした下という、ごろた石の土手の斜面に舟夫かこはちよいと舟をとめる。十二、三ばかりの、女の子が前かがみに何か線の細かな菜なの葉はをすすいでいる、芹せりかときいてみるとかすかに顔を赤らめながら、人參にんじんの葉だという。その傍そばで半襦袢はんじゆばんの毛脛けすねの男たちが、養蚕用ようさんの円座えんざをさつさつと水に浸して勢いよく洗い立てる。空からの高瀬舟が二、三艘ぞう。

船はまた岸を離れる。振り返ると、お何と典てんれい麗れいな白帝城であろう。翁鬱おううつたる、いつも目に親しんで来たあの例の丘陵の上の、何と閑雅かんがな蕈いらか、白い楼閣ろうかく、この下手しもてから観るこの眺めこそは絶勝であろう。私はつくづく下つて来てよかったと思つた。

「坊や、ほら、お城が見えるよ」

「ほんとだ、お城だ」

だが、その白帝城とも、じきにお別れである。

分流は時に細い早瀬となり、蘆荻ろてきに添い、また長い長い木津きづの堤つつみの並木について走る。

堤には風になびく枝垂柳も見える。純朴な古風の純日本の駅亭もある。そうして昔むかしづの農家。

私たちはまた振り返る。「さようならお城」はるかのはるかのはるか白帝城。

船はまた大江たいこうの河心かしんに出る。石船の帆が白く、時に薄い、紫の影の層をはらんで、光りつつ輝きつつ下をまた真近を、群れつつ、離れつつ去来する。

それよりも、実に驚いたのは、宏大な三角洲の白砂はくさのかがやきであった。実に白い、雪以上の、白以上の強い、輝く白、その「白」がその全面をもって、直射する、また氾濫はんらんする日光を照りかえず、その「白」の美感は崇高そのもの、神采しんさいそのものでなくて何であらう。常に「白」の気韻きいんを香気を幻惑を愛する私にとって、これほどのこうごうしい魅惑はむしろ私を円寂えんじやくきよう境の思慕にまで誘う。私はこれほどまでの石や砂の白い実相をかつて見たことがない。

そうして汪洋おうようたる本流、輝く白のあなたの分流、対岸の、また下流の煙霞えんか、「海、海」と隆太郎は叫ぶ。

ところで、その子はビールの空瓶あきびんを舷ふなべりから、ぽんと水に投げる。瓶は初め茶褐ちやくかつに、後は黒く、首だけでもたげもたげして流ながれに浮く。青の紫の鴨かもの首、うしろにうしろに遠くな

る。それほど舟が早いのだ。

「まだあかないの、まだあかないの」

「坊や、そんなに飲めるかい、待つてくれ」

それでも空のビール瓶がほしさの、立ち上つては両手に、しゅうつとコップにむりやりである。

「困るよ、困るよ、ほら飛行場が見える」

と、岸には黒人種風景の、裸の童子と童女がいる。松と草藪と水辺の地面と外光と、筵目も光っている。そうして薄あかい合歡の木の花、花、花、そこが北島、向う遙かが草井の渡し。

前波不動の幽雅な小丘を右に見て、また耳に聞く左は梭の音のしずかな絵絹織る松倉の里である。

と、本流の水はまた一つの三角洲を今度は左に押しつめて、広く広く斜に、河幅を右へ右へと開いてゆく。おお、また渺々として模糊たる下流。

笠島の渡しというところを過ぎる。右の斜面の鼠色じみた帆の幌の小舎の内では、禪ひとつの船大工が船の内側を河心へ向けて、ととんとんととんとんとんと釘を打ち打ちし

ている。ほればれとしたものだ。遊ぶようなその鉄槌の手。

私たちの舟はまた櫓の音も緩く緩く波上に遊んでゆく、流れはもはや急ではない、大江の浩蕩とした漣である。

北方村本郷というところで、私たちは三艘の水車船を見た。また下流で二艘の同じような船を見た。船には家があり横の両側には二台ずつの軽い小板の水車が廻っていた。内部には杵の音がし、小糠のにおいがこめ、男女の声がしていた。支那の戦車のような形の船であった。これらは流れの瀬の替わるにつれて、昨日は下、明日は上へのぼるのである。簡素ないい情趣である。

「これは、童謡になるな」と、私は眺め眺めすれちがつてゆく。

東海道線は長い長い木曾川の鉄橋が近づいて来た。

「あ、あの右袂が笠松の四季の里です、向うが雀のお宿」

素峰子は舳に立って、白に赤の黒の彩雲閣のフラフを高く高く振なびかす。ちようど鉄橋をくぐって出たところである。見ると、やや下手の左岸の松林の外では何かしきりに叫んで騒いでいる群があった。裸の童たちである。童ヶ丘とはそのお宿の砂丘にかつてたのまれて私が名付けたものであったが、こうしてちかぢかと来て眺めるのは今が初めてであ

る。

「呼んでますわア」

「君のとこの林間学校の子供たちだね。幾人ぐらい来る」

「昨年は百六十名ほど来ましたが、この夏は六十名くらいでしょうか、それに岐阜加納竹ヶ鼻笠松の子供が一週に四、五回は先生に連れられて参りました。そうです。五、七十名ずつ一ノ宮、奥町の子供も遊びに来ますで」

「それは盛んだな」と私はまた、一人が飛び、翻つた向うの投水台の強いかがやきをうち見やった。警戒標の旗の先だけが、その下の河心に赤い点をうっている。雨後の増水に流されて位置を変えたのであろう。

「起の水泳場というのはどこだね」

「ずっと下でなも」と蹲っていたのが、また立ちかける、先棹である。

「起はどうもあかんで」と後の櫓の手が右斜へいささか引き気味に、ここで刻みかけると、何鳥か白く光って空をば過ぎた。

と、私たちの小舟は小豆色のひろびろとした洲の浅みに沿って、いきれたつ蘆や薄のあいだにすれすれと横になってとまった。四季の里である。

と、その時、その裏の岸边に早くも出迎えていたその里の老主人と笠松の町長さんどであつた。

そこで「とうとうお連れ申したで」と雀頭巾は素峰子の眼鏡が光つた。

「美濃側の笠松へ第一に舟は着けてお貰いしないと承知せぬで。尾張側の雀のお宿は後まわし後まわし」で笑つて、「木曾川下りといえは昔はこの笠松までときまつていたものだ。日本ラインばかりで独占するとは怪しからん」とその家の主人がいきまいたと、それは昨日聞いた話であつた。そう聞いて、今日の眺めに接すると、全くそうに違ひないと思へた。河口はとにかく、犬山からこの笠松までの悠容たる大景を下流にして、初めて中流の日本ライン、上流の寢覚、恵那の諸峽が生きるのである。河川として他に比類のない多種多様な変化が、そうしてそれらの総合美が。

水に臨んだ広い楼の上に登つて、私は下りに下つて来た鉄橋の遥を顧みた。蘇川峽の奇勝、岩壁の鷹、白帝城、雨と朱の夕焼けと花火と、今はただ眼に入るものは雲である、江陵である。つい一、二時間前に見た白く輝く三角洲、分流の早瀬、船大工のとんとん、水車船の野趣、何だか遠い日の向うの煙霞と隔たつてしまつたような気がする。

私はまたこの晴れた日の大江の下あなたを展望した。長堤は走り、兩岸の模糊たる

彎曲線の末は空よりやや濃く黒んで、さて、花は盛りの紅と白とのこの庭の百日紅の近景である。幽雅な繁みと茶亭と、晩夏の日射と蟬の声と。

籐の卓と籠の椅子と、冷した麦茶のコップと鉢の緑の羊羹と鮎の餅菓子。

東と南とに欄干は繞り、廂にはまた藤の棚がその葉の青い光線から、おなじくまだ青い実の莢を幾条も幾条も垂らしてはいるが、そうして昼間の岐阜提灯にもが、風はそよともしないのである。

暑い、なかなか激しい。蠟塗りの白い団扇が乱れ出した。

午後一時。見おろす一面の河幅は光り、光の中に更に燦々たるものが光って、その点々を舷側に、声なく浮ぶ小舟がある。小舟には一、二の人かげの水にうつって、何やらしきりに棹で河心を探っている。それは明るいしずかな画趣である。河底の砂にうもれた「木はし」をあさるのだそうなる。「木はし」は流木の髓であると聞いた。洪水に押流されてきた樹木の磨き尽くし洗い尽くされた末の髓である。焚木としてこれほどのものはなからう。烈々として燃え滓ひとつ残らないという。河畔の貧しい生活者にもこうした天与の恩恵はある。

うち興じていると、「しこらん」という土地の名菓が出る。豊太閤が賞美してこの名を

与えたそうである。形は兜の鍔のごとく、かおりは蘭のごとしというのだそう。略して「しこらん」。私は和蘭陀語かと思つた。おこしの類で、細く小切にした、かりかりと歯にあたつて、気品のある杏仁水の風味がある。

この笠松はその昔「葦の洲」と称えた蘆荻の三角洲で、氾濫する大洪水の度ごとにひたつた。この狐狸の巢窟を発いて初めて拓いたのが三ツ家の漂流民だと伝えている。その後秀吉が築堤してから、元は尾張に属していたのを何か心あつて美濃の所領に移したものだ。と、「旧幕の頃には天領として郡代が置かれたものでして、ついこの下の土手に梟首場の跡がございしますが」と町長、椅子から伸び上つた。

鉄道開通以来、土地の人が頑固で、折角の停車場の設置を肯ぜなかつたばかりに、木曾下流の渡船場として殷賑であつたこの笠松街道もさっぱり寂れてしまったということであつた。

この四季の里は俳名馬好と号した常に馬を楽んだ風狂の伯樂が初めて営んだものだそうであつた。その馬好ももう五十年前とかに亡くなり、今は県会議員である当主が老後の樂みに買取つて、おなじく幽雅な料亭としてその跡を承け継いでいる。

じいじい蟬がまたそこらの木立に熬りつき出した。じいじい蟬の声も時には雲と梢を閑

かにする。

進められるままに私は隆太郎と階下の白い浴室にはいる。何かの蔓が葡った窓から、覗くと蘆荻が見え、河面が見える。白い浴槽の内では、そこで私が河童の真似をする。隆坊はきやつきやつと逃げあがる。

「昨日はおもしろかったかい。岩がたくさんあつたらう」

「うむ」

「お猿がいなかった」

「いなかった。僕、綺麗な銀のおしっこをしたよ」

「ふうん」とその父は乱れた髪の毛を石鹸で洗いかける。

実は宵の花火までの間を是非その子にも見学させて置きたいと思つて、甥たちに連れて出してもらつた。そこで土田まで電車で、香木峡から舟でこの父とおなじに、日本ラインを下つて来たのであつた。

「何でもよく見ておくんだ。今度来てよかつたね」

「よかつたね」

上ろうとすると、きさくな女中が大きな桃色のタオルを両手にふうわりとふくらまして

来た。

「さあ、かわいいお坊っちゃん、お拭きしましよかなも」

「いやだ」という裸のを、きゅつとかき抱くようにする。逃げかかる。そうになると、いよいよ女中もかまってきた。「ね、いい子だなも、いい子」さあ小坊主怒るまいか「馬鹿野郎、こん畜生」爪で引ツ搔く打つてかかる、彼は彼で一個の独自の存在であり、個の人格として取扱われないかぎり、少くとも自尊心を傷つけられたと感じたろう。狂人が狂人としての待遇を受ければきつと怒る。おなじ心理で、幼児もあまりに幼くちやほやされりと憤る。童謡の創作にもここはよほど注意すべきところだ。「うっちゃって置いてくれたまえ、自分で拭くから」と私は声をかけた「そうかなも、気の強いお子はんやなも」

二階には上つたが、隆太郎余憤が晴れないと見えて、窓の障子紙をぴりぴりと裂き初める。だが、こちらは堆く持つて出された画帖や色紙や短冊をそうはばりばりとやる訳にはゆかない。

少憩の後、私たちは立ち上つた。対岸の雀のお宿を訪ねようというのである。

「お坊っちゃん、早くお帰り、今夜はわたしがだいてあげるぞなも」

「いやだ、僕、北原白秋と寝るんだ」

「へへえ、この子はん、変つてやはりますなあ」
自動車が走り出した。

雀のお宿の素峰子は、自ら行乞子と称している。かつては書店の主人であつたが、愛妻の病没により、哀傷の極は発願して、奮つて無一物の真の清貧に富もうと努めた。一灯園にもはいつた、その木曾川橋畔に現在の学園を創立するまでの辛苦は並々でなかつたらしい。ただこうした事業は氣を負いやすいものである。過ぎれば俗情の禍が来る。童ヶ丘がどれほどの童ヶ丘になりきたつたか。この機会に親く観て置きたいと私は思つたのである。

雀のお宿の位置は笠松の対岸になる。低い砂丘のその松原は予想外に閑寂であつた。松ヶ根の萩むら、孟宗の影の映つた萱家の黄いろい荒壁、機の音、いかにも昔嘶の中の鄙びた村の日子かりであつた。蕙などしきちらして、郵便配達夫までが仰向けに昼寝している。その傍に杉の皮で葺いた風流な門があつた。額には青い字で掬水園と題してあつた。縁側や見透しの狭い庭には男女の村童が群つて遊んでいる。玄関の左には人間愛道場掬水園の板がかかり、ふり仰ぐと雀のお宿の大字の額に延命十句観音経まで散らして彫り、右には所用看鐘として竹に鐘がつるしてあり、下には照顧脚下と書して

ある。けだし寺であり、学園であり、在家であるというのだろう。ただ趣味としての風雅が形式として勝ち過ぎる。寧ろ飾らぬがよくはないかと私はいった。仏間が教室で良寛和尚を齋ぎ、小さな図書室が表に、裏には琅玕荘の別棟がある。琅玕荘では男女の小学教師たちが二、三十人ほど集まって私を待っていた。私は民謡や童謡の話などをして、すぐとまた席を立った。

松林にも腕白らが騒いでいた。良寛堂の敷地には亭々たる赤松の五、六がちようどその前廂の斜に位置して、そのあたりと、日光と影と、白砂と落松葉と、幽寂ないい風致を保っていた。

「こないところ、対岸にあらうとは思わなかった」と四季の里の主人も感嘆した。「とにかく、よくこれまでにやりとおして来た、見あげた」と私も微笑した。然し、これからが大事である。形式が精神を超えると名利の家となる。「素峰、これからやかましくどうぞ」と私は笑った。

私たちは桑畑と松林の間を木曾川の左岸に出た。また松林があった。テントと投水台と。西には養老の山脈、遥には伊吹山、北には鉄橋を越えて、岐阜の金華山、幽かに御岳。ついで水の向うが四季の里の百日紅。

「さあ、これから帰って一杯差上げますで」とその老主人公がさつさと踵をめぐらした。藤棚の多い四季の里の一夜の饗宴には土地の警察署長や農会長、旧知の歌人の黙々子などが加わった。私たちは幾度か庭の茶亭から茶亭へ席を代え代えした。夜がふけて私はたつたひとりで仰向きに胸や腹をつん出して眠りこぼしている隆太郎の蚊帳にもぐりこんだ。そうして、そのでつかちな毬くり頭をはずれた枕へ持ちあげ、借着の寝衣の前を深く深く合せてやると、そのままぐつすりと眠ってしまった。すぐと河霧の白い白い夜あけが来た。

私たちはその翌日、養老へ立った。そこで二泊、名古屋に引き返して一泊、それから恵那へ行った。

四

八月十二日、午後五時。

恵那峡口は遊船会社附近の鉄橋風景である。対岸に簡素な二階建ちの洋館が一つ、清流を隔てたこちらの土手の雑木、草藪、岸には空色に白のモーター・ボート、赤い線のエの

フラフをひるがえした屋形船。それに乗り込んだ私たち一行——私と隆太郎と同伴の素峰^{そほ}子^{うし}、その義弟のT少年、それにその地の「山峡」の歌人たち七、八子^し——である。肉いろの、緑の、桃いろの、パラソルを畳んで、水際に蹲^{うずくま}った浴衣^{ゆかた}の女学生らしいのが二、三人、これらは私たちの連^{つれ}ではない。たまたま雲のごとく水鳥のごとくに現れて、この風景を明るく可憐に点彩したまでのことである。

旧暦は盂蘭盆^{うらぼん}の十五日、ちようど今夜は満月である。空ははれ、風は爽^{さわや}かに、日の光は未だ強い。その良^り夜^{りや}の前の二、三時間を慌^{あわ}ただしい旅の心が騒^{さわ}めきやまぬ。駅から駅への電話が、この中津川で行先不明の私たちをやつと捉^{とら}えると、直^{すく}にも引き返さねばならぬ重大用件を取りついだのである。で、上流の福島や寢^ね覚^{さめ}の床探勝^{とどろ}の予定も中止すると、どうでも明^み十^{じゅう}三^{さん}日の朝には此^こ処^こを立^たたねばならなくなつた。で、日の暮までの僅^{わず}かな時間^かを屋形船はモーター・ボートのぼつぼつに曳^ひかせて、大急ぎで恵那峡^{えな}一帯^い帯^{たい}を乗り廻^{まわ}ろうというのである。

席^{せき}が定^じま^まつてから、「おや、あの印刷屋^{しん}さん^{しん}はどうしたね」と、私は驚^{おど}いて笑^{わら}つた。多^た治^じ見^みにいち早く私^{わたし}たちを出迎^でて^てく^くれて、それから中津川^{なかつがわ}に着^つく^くま^までの汽^き車^{しや}中^{ちゆう}を分^{ぶん}時^じも宣^{のたま}伝^{つた}の饒^{じやう}舌^{ぜつ}を絶^たた^たな^なかつた、いささか豸^{けもの}へんの恵^え那^な峡^が人^{にん}Y^えという、鼻^{はな}の白^{しろ}くて高^{たか}い瘦^{しゆう}せ

形の熱狂者が、いつのまにか掻き消すようになくなったものである。

「あはは、またお出迎いでさあ、何でも活動の撮影団が来るとかいつてましたから。とても夢中で」

とその従兄いとこの民謡詩人がツルリと禿はげ上あがったその前額ぜんがくを指で弾く。

「ほう、いそがしいね、愛郷心もあそこまで行けば命懸けだ」

何でも八景投票の恵那峡の騒ぎというものは凄すさまじかつたらしい。うっかり悪口でもいおうものなら殺される。

と、雲と山と水との四囲の風景が走り出した。

「やれ飛べ観音というのは」

「もつと上かみです。惜おしいことしました、ゆつくり御案内できないで」

光る、光る、光る、光る。銀、銀、銀、銀の水すいめん面、水面——水面。

「あれが御番所ごばんしょの森です」

幽邃ゆうすいな左岸の林に釣人がいる。一人、二人、三人、四人。麦稗帽むぎわらぼうで半シャツ、かがんで、細い棹さおの糸をおなじくしんかんと水に垂らしている。木の影が老緑おいみどり色に澄んで、びちりびちりと何か光るけはいがある。鯉こいや鮠はえを釣るのだという。あの森にはまた鶴が棲

んでいたこともあつたと誰かがいった。木曾谷の下る筏を見張つた御番所の跡であるらしい。

苗木の城址はこれに対して高く頂上の岩層にうら寂びた疎林がある。日本唯一の赤壁の城の趾があれだという。この淵の主である蟠竜が白堊を嫌つたという伝説がある。

私は「恵那峡舟遊案内」と見較べ見較べ、いそがしい、いそがしい。

風、風、風、風。

光る、光る、すばらしく光る朴の葉裏である。

翠巒、翠巒。

下手の空際には高压線の鉄塔が見える。大同電力のダムで堰かれた河流は百八十尺の高さにその水深を増したというのだ。

風、風、風、風。

水は波は、ともすると逆流する。河というよりたんたん湛えた湖水の面である。兩岸には、木の梢や、思いもかけぬ枝の半上などが水に露われて、さながら洪水にひたされた林相である。こうして急流は変じて深潭となり、山峡の湖水となり、岩はその根を

没して重畳奇峭の趣を少からず減じてしまったと聞いた。然しながらその為にまた
水は紺碧を加え、容量は豊富に深沈たる山中の幽寂境を現出した。

この恵那峡は木曾川の中流である中津川駅の傍から大井町に至る水程三里の間にあつて、
岐蘇溪谷中の最勝の奇景であるといわれている。日本ラインの奇岩怪石は多く相迫つて河
中聳立するが恵那峡の岩石美は寧ろ山上にあり千仞の懸崖にある。

「あれが青崖」

眼を遮るは濃青の脈々たる岩壁である。その下の鞆掛岩。その左は展けた下流の空
の笠置山。雲だ、雲だ、雲だ。

右には武光岩、鬼岩、墓岩、帽子岩、ただ見あぐる岩石の突屹相、乱錯相、飛躍相、
蟠居相、怪異相、趺坐相相相である。点綴するには赤松がある、黒松がある、矮樹
がある、疎林がある。

光る、光る、光る、光る、光る、光る、光る、光る、光る、光る、光る、光る、光る、光る、光る、光る、

ぼッぼッぼッぼッ、煙、煙、煙。

「や、あれが月待ヶ丘です」

「今夜の満月はさぞいいだろうな」と私はその丘の空際をふり仰いだ。それにしてもあ

まりに慌ただしい舟の速力である。

「誰か踊らないか」と一人がビールをあおった。

「あ、あれが村雨の滝です」

峡中の美橋、美恵橋が現れて来た。一名禪橋というのがそれだ。禪の節約と馬糞の拾集とから得た利益を積み立てて架橋したのが大正三年の洪水で流出した。

「禪橋が落ちた。と歌ったものです」で、みんなが笑い出した。今のは鉄橋。

「山峡」同人の指呼はいよいよ急がしくなる。天狗岩です。ほら、枕石だ、後阿弥陀岩だ、砲台岩岩岩岩。

そこで品の字岩というのが眼界に聳えて来る。文字どおりの角の巨岩が相対し重積して、懸崖の頂きにあるのだ。ただ私にはそうした奇趣に興味を持たぬ。画とし詩とするには索然たるものがあるからである。

その本流と付知川との合流点を右折して、その支流一名緑川を遡航する舷に、早くも照り映つたのは実にその深潭の藍碧であった。日本ラインにもかつて見なかつたその水色いしよくのすさまじさは、まことに深沈しんちんたる冷徹そのものであった。山中において恐ろしくいかなる湖面といえどもこれほどの水深を蔵する凄みは少いであろう。大同ダムで堰き止

められて、本来の懸崖の三分の一以上、二百仞も高く盛り上つたその水際には、すなわち現実における魚は緑樹の梢にのぼり巉岩は河底の暗処に没して幽明さらに分ちがたい。しかもまた峭々として相迫つた岩壁の間に翼を休めた蒼蒼い真上の空の一角である。雲は白く綿々として去来し、蠻氣はふりしきる蟬の声々にひとしおに澄みわたる、その峡中に白いボートを漕ぐ白シャツの三、五子がいる。この奇異な対照こそ寧ろ観るべからざるを観る一種の戦慄をさえ感ぜしめる。

朝鮮金剛の勝に私たちは当面したのである。この溪谷のいさぎよくして閑かな、またこの重畳たる岩峭の不壞力と重圧とは極めて蒼古な墨画風の景情である。夫婦岩、蓬萊岩、岩戸不動滝、垂釣潭、宝船、重ね岩、宝塔等々の名はまたあらずもがな、真の気魄はただに天崖より必逼する。

安子穴というのがあった。白狗と白馬との天正時代の伝説がある。後、お安という女の人が零落してここに玉のような童子を育てた。以前は岸边伝いからどうにか上れたであろうところも今は変じて湖上の絶壁となつた。

船止めの葦毛潭から引かえして本流に出る。

源齋巖が左に、対つて高く聳つ天柱岩がある。このあたりから丘陵の間はやや斜面に

展ひらけて赤松の細い幹が縁えんべん辺に林立し、怪奇な岩層の風致に一種の繊細味ましを交えてゆく。
 対松崖たいしようがいはこれと映照えいしょうする。

続いて、私たちの屋形船は屏風岩の岩壁にひたひたと舷ふなべりを寄せた。朝鮮金剛しんこうの勝しょう以上の大観たいくわんである。参差さんしたる松まつケ枝え、根ねに上あがり、横はに葡はい、空くうにうねって、いうところの松しょう籟さい般いはんにや若わかを弾はずるの神境しんきやうである。

巒らん気きと水光すいこうと変幻する雲、雲、雲。

右には蕭しょう々しやうしやうたる滝がある。あ、水車がある。釣人は幽かすかに棹さおをかついで細い径こみちをのぼってゆく。

簡素な別荘がある。近代の料亭もある。

鉦鼓しょうこ淵えん、ぬすと、盗人谷ぬすど、その天上の風格は亭々ていいていと聳しょうりつ立する將軍台、また巖げんとして平たいなる金床台きんしょうだい。

金色こんじきの日光。

と、展望がここで明るくなつて左に船着場があつた。エの朱線のフラフ、屋形、モーター・ボート、輝く波々、棧橋わらべの童わらべ、風、風、風。

木の間こまがぐれの茶亭の下へ、さて上あがつて、ズボンの釦ぼたんをはずす男もいる。

その正面こそ大同電力の白い白いダム堰堤である。古典的の幽邃と奇峭とはここに変転して、近代の白と灰銀との一大コンクリート風景を顕現する。水はまんまんとして、そのダムに堰かれて湛え、橋梁の連灯はまだ白く、玻璃球のみ光つて、丘陵の上、また水辺に反照する鮮明なる洋風建築、このダムこそ東洋一の壯觀だとせられる。その堰堤の高さ百八十尺、長さ一千尺コンクリート、貯水量十億立方尺、堰堤上流三里十二町、面積百七十一町、水量流域百二十三方里、発電機四台、励磁機二台、電力四万二千九百キロワット。惜しむらくは下流に立つてこれを仰視し得る機会を得なかつたことである。

私たちはその壯麗なるダムの前広々とした湖面を一周して、さて、いよいよ歸路についた。急速力である。

遊船会社の前の峡口は高い高い白い石の橋台に立つて、驚くべき長い釣棹を垂れている人影も見えた。橋の下にも幾群か糸を投げて魚を待つ影も見えた。

夕焼けが来た。さわりさわりとその肩の長い棹を弧に、その先きを線路につけて、その鉄橋の枕木の上を拾い拾い渡る男も見えた。

私たちは上つて、撮影をすると、すでに灯のともった臨時電車にぞろぞろと乗り込む、走る、走る、走る。

私は思った。恵那峽の幽邃ゆうすいはともすると日本ラインの豪宕ごうとうを凌ぐしの。ここまで上つて来なければ木曾川の綜合美は解せられない。すばらしい、すばらしい。

さて散策して見た中津の町は電飾あざやが鮮かではあつたが、いかにも北国ほっこくの小都市らしく、簡素で、また陰暗たるところがあつた。

その晩、梅信亭ばいしんていで饗宴もよおが催された。この町の若い美技びぎが輪になつて、そこで、紅い頭あか巾に花笠、裁付袴たつつけばかまのそろいで、本場の木曾踊りを踊つた。だがあまりに巧緻こうちに過ぎ、

柔軟に過ぎた。「民謡とはそんなもんじやない、おうい、俺おてほんが御手本おてほんを示してやる」私も酔つていた。隣室に飛び込むと、それ何、それ何、それ何という騒ぎになつた。

紅い頭巾で、背中に花笠で、裁付袴たつつけばかまで、やあよいかとゆらりと出て行くと、若い町長初め、一同がやんやと拍手した。

そこで、ちよつと紅い頭巾の頭を搔いて、私も笑い出した。大胆というより無鉄砲なのだ。

「おうい、坊や、いつしよに踊ろう。ヨイヨイヨイのヨイヨイヨイだ」

この夜こそ旧曆の盂蘭盆うらぼんであつた。明るい明るい満月である。

青空文庫情報

底本：「日本八景 八大家執筆」平凡社ライブラリー、平凡社

2005（平成17）年3月10日初版第1刷

底本の親本：「日本八景―十六大家執筆」大阪毎日新聞社、東京日日新聞社
1928（昭和3）年8月15日再版

※「船」と「舟」の混用は、底本通りです。

入力：sogo

校正：岡村和彦

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木曾川

北原白秋

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>